
1. アハバールフロムヨルダン 《代表からの挨拶》

(1) 代表からの挨拶

サダーカ代表 田村 雅文

何回目かのシリアの停戦合意、今回こそは何としても停戦が続き次へのステップに進んでほしい、そう強く願いながらこのメッセージを綴っています。

7月のラマダン（1か月間の断食月でイスラーム教徒にとっては1年に1回の大事な月）から2か月後の今月9月は犠牲祭というお祭りです。特にこの行事では、日本のお盆のように先祖へのお墓参りをし、普段多くの人が食することができない羊肉を恵まれない人に施し、先祖への供養を行います。毎年サダーカも数頭の羊をパートナーであるアブターレク氏と共に購入し、特に都市部の厳しい環境にいる方々に配布をしています。ヨルダンの特に収入も無く、弱者を抱え厳しい環境下にいるシリアの方々は、見えない将来と厳しい日々の生活をやりくりすることが精一杯で普段肉はもちろん十分な栄養を採ることもできません。

この国でシリアの人たちと接していて唯一の希望を感じるのは、障害を負った若者たち、あるいは若干の金銭的余裕があるシリア人たちがシリアの未来のために力を付けようと懸命に努力する姿です。サダーカはそうしたシリアの人たちを少しでも側面支援できるよう金銭的な支援のみならず情報収集や意見交換も続け、またそうした情報を日本や世界に発信する活動を、ヨルダンを訪問する方々の力もお借りしながら更に力を入れて行っていきたくて考えています。

停戦合意前からシリア国内の友人から聞こえてくるシリアの状況は、場所によっては一時に比べ人々の生活が安定化し既に小さな規模での停戦が行われているという話も伝え聞きますが、様々な勢力による小競り合い、武力衝突は続いており、また「敵も味方も分からない」混沌とした状態が慢性化しつつある地域もあります。来年のラマダン、犠牲祭こそは家族と共にシリアで・・・そう思いながら今年も停戦合意のニュースとその後の動向を注意しながら見ています。多くのシリア人の帰還への願いが「実らない願望」にならないうちに停戦合意の次のステップへ、そう改めて強く願っています。

停戦合意の次のステップを目指して、サダーカは今の段階からシリア人同士が少しでも協力し、互いを認め合い、共に新しい家族や地域、そして国家を作っていくための意識と力を養っていけるように、できる支援を続けていきます。

なお、代表が取材を受けたBuzzfeedに記事が掲載されておりますので、是非ご覧ください。

<https://www.buzzfeed.com/kotahatachi/stop-killing-in-syria>

(2) ヨルダン3度目の訪問（シリア・パレスチナ・ヨルダン）

サダーカ・インターン 市村 亜衣

いつの間にか大好きになったヨルダン。

今回も素晴らしい出会いがあり、学びがあり、新たな想いを持つことが出来ました。

最近イスラム国の影響でイスラム教や中東へのネガティブなイメージがありますが、私が出た温かい経験を共有させていただきます。

是非遠い世界で関係ないとは思わずに、同じ世界で今起きていることだと認識していただけたらと思います。

〈負傷したシリア難民との交流〉

負傷したシリア難民が短期的にリハビリのために滞在する宿泊型施設に訪問しました。

ラマダン、イードホリデー時期ともあって居住者の何名かは近隣の家族と共にすごしており、通常よりも静かな施設への訪問でした。

初日の訪問は日本人数名の訪問であったため、施設にいる女性3名に名前や年齢を聞き、表敬訪問的な感じで終わりました。

2日目は1人で行ってみました。

“Welcome Tasneem (私のアラビア語名)”

あったかいハグとヒジャブを外して無邪気な笑顔で迎えてくれたwちゃん22歳。

“ヒジャブとってよ”とアラブ女子会のスタート。私もヒジャブを外し、ほぼ話せないアラビア語とグーグル翻訳とwちゃんの英語で会話を楽しみました。

彼女は2度の爆撃で何かの破片が脊椎を損傷し、歩行がアンバランスです。

7ヶ月前に手術のためヨルダン入り、リハビリのために当施設で生活しています。1年前に結婚したばかりの新婚で、夫は11人の兄妹、両親ともに皆シリアのダラーに住んでいるそうです。

“家族の写真見る？”とスマホにある沢山の写真を見せてくれました。家族への想いが溢れていることがわかり、聞くまでもなく1人で異国の地で生活することは寂しさも溢れているのだらうとも感じました。

早く良くなってみんなに会いたい一心で毎日ウォーキングマシーンでリハビリしているそうです。施設に来た時は歩行すらできなかったのだから、彼女の努力は多大なものだとわかりました。

そんな私達の話を見てくれるs君ママ。s君16歳は爆撃で脳を損傷し、ほぼ寝たきりの状態で当施設で生活しています。3ヶ月前彼女はs君と手術のためにヨルダン入り、3人の娘と夫はシリアのダラーにいるそうです。

前日までに何を私がしてきたのか、写真を見たいと言われました。丁度前日にシリア難民家族宅でご飯をご馳走になっていたのも、その写真を見せると、彼女は泣き始めました。自分の娘を思い出したと。毎日電話しているがシリアの状況や無職の夫、学校に行けない娘達への想いが沢山あるのだなと感じました。涙を拭き取り笑顔を見せてくれるが、とても切ない気持ちになりました。

彼女自身も以前は甲状腺の問題で服薬していましたが、今は薬を買うお金もないためそのままにしているそうです。

毎日息子の世話、施設全体の食事の準備が彼女の役割ですが、この先の不安と早くシリアに戻りたい気持ちと様々な想いで日々をこなしているという印象を受けました。

“今度はここに泊まって、ご飯を一緒に食べよう”と約束をしその日は退散。

3日目の訪問。

偶然旅先で出会った香港人の新米ナースを連れて訪問。昨日施設で話を聞いた2人にも紹介をしました。話題はやはり健康の話。“バルーンを外すことはできるか？”，“甲状腺の薬を飲んでないが、気をつけることはあるか？”など。臨床経験がまだないナースに質問し満足な回答ではないが、自分の健康の話聞いてもらえる人がいるということが安心させている感じが伝わってきました。

そしてやはりもてなし精神。アラビックコーヒーとシリアのお菓子を出してくれました。丁度施設ではパーティーが行われるようで、様々な人が出入りしており、このような機会が彼女達の単調な日々に変化をつけているのだと感じました。

別れは強〜いハグと再会を約束してバイバイ。

*車椅子ユーザーが多いにもかかわらず、入り口に長～い階段があります。入居者の1人はその階段での行き来で手術で固定したボルトが何度か外れてしまうということがあったとのこと。そして未だに治せていないため、痛みとともに生活しているといえます。環境整備も地道に伝えていく必要があることが分かります。



〈負傷したシリア家族との再会〉

昨年9月に訪問した家族から、イフタール(断食後の初めての食事)のお誘いを受けました。久しぶりの再会への楽しみと、切り詰めている生活の中招待してもらおう申し訳なさや色々な想いで訪問。

5人家族変わらず笑顔で迎えてくれました。この家族のお父さんがシリア政府から拷問を受け、下肢麻痺車椅子ユーザーとなったそうです。そして豪華なアラブ料理の数々。かなりの時間をかけて奥さんがつくってくれたのだと感じました。

“カナダへの移住を申し込んでいる”

650名くらいの待機人数らしいですが、カナダに移住を計画しているといえます。皆が申込みの訳ではなく、小さい子供等がいる家族が優先とのこと。以前より支援も減り、現在 UNHCR から月2万円くらいの生活費で住居費以外、光熱費・通信費・生活費など払っており、手元に残るお金はあまりありません。ヨルダンにきて3年くらいになるそうですが、やはり疲労感はありませんでした。

JICAがシリア難民を対象に行っているトレーニングを受けて、お父さん本人は以前に増して自信があるように見えました。あと英語が少々できれば、カナダでも色々な活動ができるのではないかと感じます。一方で強く感じたのは奥さんの疲労感。レスパイトケアの重要性、支援者の活動提供が必要ではと感じました。

日本からの古着を渡すと日本の皆さんに感謝を伝えて欲しいとのこと。この場を借りてご協力いただいた日本の皆さんに御礼申し上げます。

この日もまた“次は泊まって行って欲しい”と暖かい言葉を頂き、ハグをして退散。またももてなされてしまいました。

帰り際施設内の男性陣の部屋も寄りました。昨年会ったA氏はJICAの卓球でガタイが良くなっていてびっくり。しかし彼は危険承知でシリアに近いうちに帰るといいます。やっぱりもう疲れているんだなと感じました。

〈シリア難民の子どもとのイフタール〉

写真にありますが、シリア難民の子ども達とイフタールを頂きました。無邪気な子ども達。どのように状況を把握しているのか。この子達から笑顔は奪ってはいけないと、強く思いました。



〈エルサレムへの訪問〉

ヨルダンのシリア人、ヨルダン人に羨望の想いをつたえられ、またこれまで様々な情報を得て複雑な想いを

持ってエルサレムへ訪問しました。色々入国に問題がありましたが、無事に入れ、パレスチナ人支援をする日本人の友人に会うことができました。そこで印象的だったのは彼女の組織はパレスチナ人支援を30年行っているということ。始まりは誰も30年続くとは思ってなかったでしょう。難民キャンプは劣悪な状態で、その地域は塩水でシャワーを強いられているそうです。どんな些細な争いでも深く傷を残し、長期に渡る支援を余儀なくされることを痛感しました。状況の混沌化、支援団体の疲弊、シリアも同じ状況です。

〈最後に〉

ヨルダンには歴史的に難民を受け入れ、国際機関より支援を受け続けている国です。かつてはパレスチナ、イラク、今はシリアと難民を受け入れてきました。シリア難民が来てから物価が少々上がってきているといいます。ヨルダン人友人曰く、国際機関からの支援もこの御時世減ってきているとも。若者が就職出来ずにデモも起こし、問題は難民だけではなく、ヨルダンに長く住む人々も疲労でいっぱいだということが分かります。

“争いが無くなることが目的ではなく、支援をすることが目的となっている”

日本人グループでの会話で教えていただいた大事なポイント。確かにな、と感じました。

今誰が争いを本当に止めようとしているのか。どうすれば解決できるかという話し合いが出来ているのか。

ゴールに向かう対策が共有されていない世界の動きに疑問が湧いてきました。同時に“難民”とされている人に私は何が出来るのか、深く考える機会にもなりました。

色々情報提供してくださったサダーカの田村さん、イードのお祈りに連れて行ってくれたアブターレクさん、シリアクロスボーダーの皆さん、豪華な料理でもてなしてくれたシリア人一家、在ヨルダンの日本人の方々、シリアの障害者のエンパワメントを頑張るシリア人友人、ヨルダンのママ、ありがとうございました。

(3) インターンを通して

サダーカ・インターン 大竹 奈緒

今年2月から、インターンとして活動に参加させていただいてから半年が経ちました。

私は昨年8月、大学の校外実習で、ヨルダンの首都・アンマン都市部に住むシリア人の生活状況調査をするため、30の家庭を訪れました。そこで出会った人々は、想像以上に厳しい生活を強いられ、絶望や諦めとはこういうことか、と思った瞬間でもありました。ある高齢女性は、「ヨルダンには水も



ない、食べ物もない。ここで我慢して生活するぐらいだったらシリアに帰って死んだほうがマシだ」と強い口調で訴えてきました。衝撃と戸惑いを隠せず、ただ話を聴き続けることしかできない自分をやるせなく感じていました。しかし、こうしてヨルダンで出会ったシリアの人々との出会いを、ただの思い出だけで終わらせられない。その気持ちがインターンとして活動をさせていただくに至った大きな理由です。

この半年間、「シリアの情報共有と意見交換のための全国会合」の開催に向けて主に携わりまし

た。これは日本国内でシリアもしくはシリア人に関わる活動をしている人たちがテレビ会議でミーティングをし、在日シリア人の支援から紛争停止に向けたイベント等の開催まで、意見交換をする場です。これまで2回の実施の中で、60人以上の方に参加していただきました。多くの日本人が各地でシリア人と関わっていることに驚くとともに、シリアやそこに住む友人たちへの想いを強く持って活動されていることに気づきました。

また、活動する中で得た人々とのつながりは、自身のフィールドを大きくさせてもらいました。あるメンバーの方からお誘いをいただき、P782 プロジェクト（PはPeaceやPrayの意味、782は全国の大学数です）という学生グループにも関わり、日本政府に対してシリア人留学生の受け入れや第三国定住事業の拡大について政策提言を行いました。4月には国会議員6名に対して、5月には伊勢志摩サミット開催に先駆けて行われたG7ユースサミットで発表しました。草の根活動以外にも、政策提言活動といったアクションを起こすことができることを実感でき、貴重な経験となりました。

こうした活動の中で常に感じるのは、やはりシリアへの想いが活動への原点になっているということです。私は紛争前のシリアに行ったことがないですが、それでもヨルダンで出会ったシリアの人々は温かく、私に大きな変化を与えてくれました。だからこそ、何かしらの形で恩返しをしたいと思っています。

このような機会を与えていただいたサダーカみなさんに感謝します。シリアの紛争が一刻も早く終わるように、市民社会に生きる1人として今後もチャレンジしていきます。



2. アハバールフロムニッポン 《日本での活動の報告》

(1) シリア和平ネットワークの活動報告と今後について

サダーカ・アドボカシー担当 小泉 尊聖

「シリアの声を伝えてくれてありがとう。」

5月末の伊勢志摩サミットでシリア和平ネットワークが行った記者会見に出席したシリア人ジャーナリストの感想です。先号のメルマガ Vol. 8 で御報告した通り、サダーカはほかの NGO と共に伊勢志摩サミットを目指して、日本政府がシリアの戦争終結のためにリーダーシップを発揮するようシリア和平ネットワークを創設し活動してきました。

3月に京都で、5月に四日市で、国内外の NGO と共にG7 各国政府にシリアの平和のために行動するよう訴え、サミット本番の5月26日には国際メディアセンターから世界に向けて、平和を求めるシリア人の思いを伝える単独記者会見を行いました。冒頭発言は中東の通信社の特派員であるシリア人による記者会見の折のコメントです。

(シリア和平ネットワークの活動について詳しくは以下のサイトをご覧ください。)

http://www.sadaqasyria.jp/_src/sc984/syriaPeaceNetworkActivityReport20160728.pdf

そうしたネットワークの動きやSDG（持続可能な開発のためのアジェンダ）の実施を求める市民社会、そして難民問題の解決を訴えてきた学生達（P782 プロジェクト：<http://www.p782.org/>）の声に押されるように、日本政府は5月のサミット直前に「G7伊勢志摩サミットに向けた我が国の主な貢献策」の一環として、「中東地域安定化支援策」

（<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000158289.pdf#search=%E4%B8%AD%E6%9D%B1%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E5%AE%89%E5%AE%9A%E5%8C%96%E6%94%AF%E6%8F%B4%E7%AD%96>）を発表しました。中東地域の2万人の人材育成を含む計60億ドルの支援や、シリア人留学生150名の受入など、日本政府からすれば画期的なものです。シリア問題の根本的解決を促すには不十分です。

これまでに私達が日本政府や与党政治家と協議を重ねる中で見えてきたのは、日本がロシアや米国のようなシリア和平協議の主要アクターになれなくとも、和平実現に必要な環境・信頼醸成に貢献する可能性があることです。具体的には周辺国に逃れたシリア難民の間で対話を促し、将来の平和のためにシリア人による共通のビジョンが生まれるよう手助けすること、さらにシリアと日本の有識者の間で和平実現に向けたフォーラムを設けることを私達は日本政府に求めています。

ヨルダンではシリア難民自身が自らのイニシアチブでシリア難民を助ける活動を展開しています。その中には復讐心に燃える仲間と戦いの無意味さを説いた障害者のリーダーがいました。そうしたシリア人の中から生まれた平和の芽を育てる試みです。すでに濱地前外務政務官を始めとする外務省関係者からは前向きな反応を頂きましたが、私達の提案を具体化させるには幾つものハードルが残っています。

シリアではアレッポをめぐる攻防が益々激しくなっています。国内に残された人々の生活は苦しくなるばかりです。大国の思惑に和平の行方が左右されることはあっても、シリアに持続可能な未来を築けるのはシリア人しかいません。友人として彼らの平和への思いがなんとか実を結ぶようシリア和平ネットワークは活動していきます。そのための第一歩が先に述べたシリア難民間の対話促進プロジェクトとシリア和平フォーラムの実現です。

(2) 「4,000,000分の1のシリア人のストーリー」（於明治大学）シリア映画上映会の報告

サダーカ・サポーター 佐藤 友紀



みなさま、こんにちは。シリアの映画「目を閉じれば、いつもそこに～故郷・私が愛したシリア～」の制作スタッフの佐藤友紀です。この度、2016年7月23日、明治大学にて「4,000,000分の1のシリア人のストーリー」というタイトルにて同映画の上映会を行うとともに、シリア人の声を伝えるためのイベントを行いましたので、この映画作成の経緯や個人的な感想を交えながらそのご報告をさせていただきます。

映画「目を閉じれば～」についてはサダーカでも何度も取り上げて頂いているのでこのメールマガジンを読む方にとってはご存知の方も多かもしれませんが、シリアの為に何かしたい！と考える学生や社会人、大学関係者等が集まり、全員がボランティアとして活動をする中で作られた映画です。2015年10月に難民映画祭に応募した結果上映作品として選出され、その後も多く上映の機会を頂いていま

す。

今回は会場となった明治大学も参画する「国際協力人材育成プログラム」主催、UNHCR 様にもご協力を頂き、映画制作メンバーも協力して上映会実現となり、制作者トークとジャーナリスト、NGO 関係者の方から貴重なお話もお伺いすることもできました。

制作者トークの場では何故シリアに関わろうと思ったか、映画を制作するに際しての苦労等をお話させて貰いました。メンバーからは、カメラの前で中々本音で話すことができないシリア人の声をどうやって伝えるべきなのか苦労したとか、プロジェクト進行中にはテレビからの取材を受けたこともあったのですが、何か事件があってシリアが注目されている時にしか注目されないことへの葛藤等、実体験を元にした話がありました。



ジャパンプレスの藤原様からは、シリアにおける取材についての現状と、また実際に取材を行うことができた際に撮影をしたシリア国内の貴重な映像を流して解説して頂きました。紛争当初は何とかシリアに入って取材をする手立てはあったものの、現在はジャーナリストであってもシリア国内に入って取材をすることが難しいとのことでした。AAR Japan の景平様からは AAR Japan 様のシリア難民支援活動を通じて、彼らの生活や移動の実態や、難民としての困難はどこから来ているのか等について具体的なお話がありました。専門家から教えていただくことで、制作者の体験談に留まらないシリアを取り巻く状況を教えていただきました。

また、サダーカの田村さんからはシリア国内の田村さん自身の友人の声を流し、申し訳ないと何度も謝りながら困窮を訴える声を紹介してくれました。一刻も早くこの紛争を止めて始めてシリア人の生活の再建が始まるのだとのメッセージがありました。上述の通りシリアに踏み込むことは出来ないため、国内の声を取材したり、伝えることは本当に難しく、その意味で貴重な声を聞かせて貰ったと考えています。



3 時間というただでさえ長い予定時間を超えて多くの方が残って話を最後まで聞いて下さったのが印象的でした。約 120 名程の方にご参加いただきました。「多様なバックグラウンドを持つ人々が壇上で話していたので、感情移入しやすく、専門的な話も最後まで聞くことができた」「日本の若い人々がシリアの難民問題に様々な形からアプローチしている実態に、新鮮な驚きと力強さを覚えた」シリアに対しては「故郷への思いは変わらず戻りたい人ばかりとは思いますが、諦めの気持ちが大きくなりたいで欲しい」等の感想が寄せられました。



上映会は写真展も同時開催を行い NPO 法人 FiLC、東京外国語大学シリア研究会、みんなで作るシリア展、吉竹めぐみさんの写真を展示させていただきました。休憩時間には写真を見て参加者と主催者で話が弾むきっかけとなりました。

一つ、残念なことがあります。この映画を撮影、制作していた2015年頃には、2016年にはシリアの紛争が終わればいい、せめて、少しでも良くなっていけば・・・と願っていましたが、残念ながらこの願いは実現せず、現在も悪くなる一方です。この映像に携わってくれたシリアの方々も、ヨーロッパに行ったり、ヨルダンで仕事を見つけたりして色んな形で人生を歩み始めていますが、一様に疲れていて、シリアに帰りたいという声が変わることはありません。彼らのために何ができるか。改めて考えさせられた一日でした。

(3) 東京築地本願寺にて報告会及びトークセッション開催の報告

サダーカ・スタッフ 田中 雅人

8月10日(水)、「シリア支援団体サダーカが伝えるシリア人難民の今～ヨルダン都市部に住むシリア人と出会って見えたもの～」と題し、東京の築地本願寺にて報告会及びトークセッションを行いました。酷暑のなか当日は110名ほどの方にご来場頂きました。サダーカ代表の田村雅文氏に加え、ミュージシャンのSUGIZO氏、ラジオDJの武村貴世子氏、フォトジャーナリストの佐藤慧氏、サダーカメンバーの斉藤亮平氏、以上の5名が第一部、二部に分かれて登壇しました。



第一部では、田村代表が、青年海外協力隊として赴任していた2005～07年の紛争前のシリアの風景や人々の暮らしぶりについて自身の体験談を交えながら話しました。勤務地であった農村部は、見渡してみても建物もまばらで、家畜と農地ばかりが目につく土地柄にもかかわらず、農村部の村長の「ここにはなんでもあるだろう？」という言葉に最初は当惑するものの、次第に家族や土地、衣食住のすべてが揃ったこの村に他に何が要るだろうかという、彼らの精神の充足と豊かさ気付かされたという田村代表。紛争前の美しい街並

みなどがある一方、現在戦禍によって変わり果ててしまったアレッポの旧市街やシリア各地の街の様子も紹介されました。最後には第二部の導入とも重なる形で、戦争下におかれたシリア人の状況についての解説がありました。一般的に大手メディアでは周辺各国の難民キャンプにばかり焦点が当たりがちであるということを踏まえ、今回は特にそうした普段報道されないシリア人の現状についての話がありました。まず「難民」とひと口に言っても、欧州や周辺諸国のみならず、シリア国内にも家や故郷を追われ、衣食住もままならず、常に戦闘地域と隣合わせの国内避難民が数多くいることや、隣国ヨルダンにいる難民の8割は難民キャンプではなく首都アンマンなどの主要都市部で賃借りをしていること、賃払いのための現金収入がなく、居住の把握が困難な都市部に暮らす多くのシリア人家庭に対する家庭訪問を通じた支援の必要性などを指摘しました。

続いて第二部では、田村代表に加えて今年3月に現地アンマンを訪問した上記4名のゲストを交えてのトークセッションが行われました。特にSUGIZO氏、武村氏は、ヨルダンはもちろん、中東地域の国に訪れること自体が初めてだったそうで、「テロリスト」や「危険」といったイメージとは裏腹に、遠方からの来訪者に対するヨルダンの人々の温かさ、朗らかさに良い意味で期待を大きく裏切られたと、彼らの日常の姿を捉えた佐藤氏の写真を交えながら、口を揃えて語られました。登壇された5名は現地でシリア人難民の家庭訪問を行っており、そこでも家庭ごとに異なる経済事情、都市部で孤立

しがちなシリア人の姿を目の当たりにされたとのことでした。最後に SUGIZO 氏は難民流出の根本的原因である戦争を止めること、そして誰がこの戦争で利益を得ている、そうした数ある受益者に、我々日本人もいつか加担してもおかしくない、あるいは既に加担している可能性も排除できないことを示唆し、我々の身近なことと世界各地の動乱を結び付けて考えることの重要性を指摘されました。

ご参加頂いた皆様、本レポートを読んでいただいた皆様、ありがとうございました。今後もサダーカは、シリアの人々の声を届け続け、紛争終結に向けて、活動を続けていきます。ご理解、ご支援のほどよろしくお願い致します。

(4) 学生インターンの紹介

現在、サダーカで学生インターンとして活動に携わってくれている方を紹介します。

安藤めぐみさん（明治学院大学学生）

「ゼミを通して、シリア紛争について学ぶ中で、実際にシリア支援活動を行っている団体が、どのような活動を行っているのか、またどうシリア紛争終結に関わっていくことが出来るのか考えるため、インターンを志望しました」

安藤さんにはイベントや会議での運営補助として携わってもらっています。サダーカではこれまでも学生インターンをして活動に関わってくくださった方が多くいます。実際に学生インターンというかたちで行動を起こすことで、自分自身がどうシリア情勢に関わり、何が出来るのか、またシリアについて多角的な知見を持ち、考えるきっかけになってくれればと期待しています。サダーカの活動に関心のある方は、問い合わせメールアドレスにご連絡ください。

★☆☆

このメールマガジンは、勝手ながらこれまでシリア支援の関係でお会いした方々、ご支援を頂いている方々へお送りしております。今後の配信を希望されない方は、お手数ですが、以下までご一報を頂きますよう、お願い申し上げます。配信停止はこちらまで：info@sadaqasyria.jp
なお、このメールの配信元の akhbar@sadaqasyria.jp は配信専用ですのでこのメールへの返信はできません。

★☆☆